

かめのりコミュニティ THE KAMENORI COMMUNITY

公益財団法人 かめのり財団は
日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて
未来にわたって各国との友好関係と
相互理解を促進するとともに その架け橋となる
グローバル・リーダーの育成を目的に
事業を行っています

今号の内容

大学院留学アジア奨学生
夏の研修交流会 オンライン開催
証書授与式

かめのりカレッジ2020
-エクストラ・エディション-

特別インタビュー
コロナ禍からみた国際交流のこれまで、
今、そしてこれから
国際交流事業助成

No. 35
NOV. 2020

公益財団法人
かめのり財団
Kamenori The Kamenori Foundation

世界的な新型コロナウイルス流行は夏の間も収束の兆しを見せず、(公財)かめのり財団では事業の中止や実施方法の変更が続いています。残念ながら、多くの青少年交流事業や海外日本語教育サポート事業は、今年度の実施を見送りました。一方で、オンライン環境を取り入れて、大学院留学アジア奨学生の恒例行事や、日本人大学生向け研修プログラムを、通常とは異なるかたちで実施いたしました。また今回、初めての試みとして、コロナ禍に直面し早急な追加支援を必要とする団体や留学生を対象に緊急支援助成を行いました。

今号では、この夏の新たな取り組みをお伝えするとともに、特別企画として、2012年以來共同事業のパートナーである(独)国際交流基金より、企画部長・小島寛之氏にお話をうかがいました。



大学院留学アジア奨学生 証書授与式の様子

大学院留学アジア奨学生 夏の研修交流会 オンライン開催

2020年9月9日(水)・10日(木)の2日間、大学院留学アジア奨学生の夏の研修交流会を、オンラインにて開催しました。

かめのり財団では2007年より、アジアから日本の大学へ留学している大学院生への奨学支援を続けています。その奨学生たちの研究の進捗発表と、相互交流の促進を目的に、毎年夏に研修交流会を行ってきました。

今年は奨学生からの希望により、古くから海外との交易の港であり、また戦争の傷跡を持つ長崎県長崎市にて研修を行う予定でした。夏の間、日本全国の新型コロナウイルス感染症拡大状況を見守りながら、実施可能性の検討を続けましたが、最終的に奨学生の安全と健康を重要視し、Web会議システムを利用したオンラインでの研究発表会を行いました。

1日目は、春休み以来母国に滞在中のグエンティトゥタオとクイシェンキアンが、研究の進捗状況を報告。続く2日目は、国内にいる奨学生5名が研究報告を行い、それぞれ発表の後には意見交換の時間をもちました。さらに、現在大学教員として活躍中のOB、胡新祥(西安理工大学)と徐寧教(神奈川大学)が現役奨学生に向けて、留学生時代の経験や現在の研究者・教員としての活動について語ってくれました。

PCの画面越しではありましたが、奨学生たちがお互いの報告に刺激を受け、また先輩の言葉に励まされている様子がとてもよく伝わってきました。そして何より、自粛生活が続くなかで、久しぶりに顔を合わせる仲間や4月から新しく加わった1年目の奨学生との交流は、参加者全員にとってかけがえのない時間となりました。

「コロナ禍に適した人生初めてのZoom交流会」

文：グエンティトゥタオ 早稲田大学 アジア太平洋研究科

今年9月9日と9月10日の2日間をかけて初めてオンラインの形で夏の研修交流会が行われました。かめのり財団の奨学生として交流会に参加できるのは最後となります。楽しみにしていた交流会なのに、残念ながらコロナの影響で中止となりましたが、この状況だからこそオンラインで参加する機会を与えてくれて感謝しております。交流会の準備は去年より東京の奨学生の3人で集合して話し合うことにしていましたが、形を変えなければなりませんので、一から企画を直しました。全体的に少々短くして、また観光時間がないため、3日間を予定していた交流会が2日間に収まりました。

1日目は私と大阪大学大学院のクイさんの発表でした。クイさんは私と同じ年に奨学生になりましたし、彼女の研究発表を3年間毎回聞くことができました。普段だと違う大学の違うゼミにそれぞれ入っているという全く接点のない二人のようですが、毎年交流会を通じて同じ道で歩いていくような友達ができて、心から嬉しく感じます。

2日目は日本時間の9時半から始まりました。皆さんの研究発表を聞いて、自分の視野が広がるだけでなく、自分の文化から見る視点をシェアすることができ、そのことに気がついてから、研究発表会の中では私は唯一のベトナム人ですし、役に立つ情報をお伝えできていれば嬉しく思います。また、「隔たりを認識しながら歩いていきなさい」ということを先輩の講義で習いましたが、すごく実感できました。皆様が日本時間12時から昼休みを取りましたが、時差のため私のいるベトナムではまだ午前10時でした。時間だけでなく、隔たりは在日留学生にとってぶつかり合う機会が多いですが、問題を抱えながら努力し続けたいと思えました。

たった2日間という短い期間でしたが、家にもりきりの生活が続いている中、皆様の顔を見ることができ、色々話してもできて、自分がかめのりファミリーの一員としてかかわっていることに喜びを感じました。

③ 研究内容の概要:市場拡大

製品は保護された特権を持つ資格があり、
>>模倣される危険性および著作権侵害による利益損失のリスクを最小限に抑える

>>規模の経済による利益を享受するため、輸出量を増やすより強力な保護があれば、
その国の国内市場は外国企業にとって魅力的なものになり、
外国企業はより多く輸出し、その国の輸入は増加すると予想される

「コロナに負けず」

文：クイ シェンキアン 大阪大学 言語文化研究科

いつも4月は、新奨学生証書授与式で新奨学生を迎え、現役奨学生とOBOGとが交流できる大切な時期ですが、今年は新型コロナウイルスの影響でその時期に皆様と会うことができなくなってしまい残念でした。皆様はお元気にされているか、また新奨学生の方はどんな方か、どんな研究をされているのか知りたかったです。

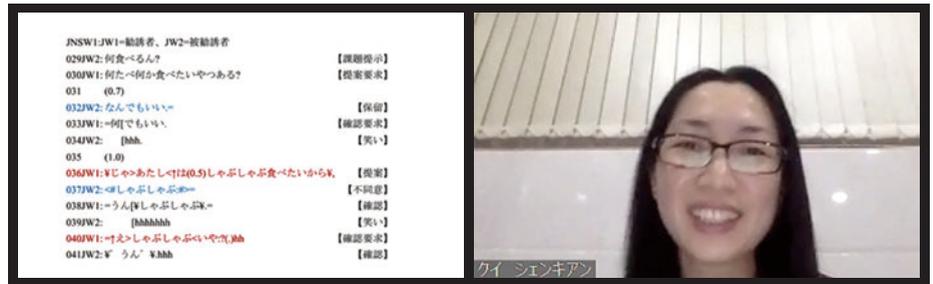
その後、夏の研修交流会のために、8月に一度皆様とオンラインの打ち合わせがありました。直接会えなくても奨学生全員が顔をあわせることができ嬉しかったです。打ち合わせで、夏の研修交流会についての話だけではなく、今の状況や生活などについても少し話し合い、少しずつお互いのことを知ることができました。話の中で、新型コロナウイルスの影響で、通常通りに大学に行ったり、図書館を使ったりすることができず、家に引きこもってストレスがたまるなどの話もありましたが、皆様が元気に過ごしているようでよかったです。

今年の夏の研修交流会では、長崎に行くことになりましたが、まだカンボジアにいる私とベトナムにいるタオさんは発表の際にオンライン

で参加することになりました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大が収束しないため奨学生の安全を考慮していただき、長崎に行く時期を再調整することになりました。そして最終的には9月9日と10日にオンラインで研究発表のみ行われました。9日の午後に2人の発表、10日に残りの5人の発表があり、その後OBの講義がありました。私の研究と一番近いチャニカーさんをはじめ、去年から人気だったジェットさんのマンホールの蓋の研究、新奨学生の宜さんのCO2の研究など様々な内容の研究が聞けてとても勉強になりました。新型コロナウイルスに負けずに研究を頑張っている皆様の姿を見て、とても

励まされました。またOBが留学生の時代の経験を語ったり、アドバイスをくださったりして、私の研究生生活のためになることをたくさん提供してもらえたので大変嬉しかったです。

また、9月12日には新奨学生証書授与式と卒業生記念品贈呈が行われ、私はまたオンラインで参加させていただきました。OBOG、新奨学生、現役奨学生、今年修了した皆様の顔が見られてとても嬉しかったです。今までとてもお世話になった修了した皆様とこのような形で別れるのはとても寂しく感じましたが、皆様と同じ気持ちで、いつかまた会えるのを信じています。皆様と再会できる日まで頑張りたいと思います。



「初オンラインでの夏の研修交流会」

文：チッターラーラック チャニカー お茶の水女子大学 人間文化創成科学研究科

9月9日から10日までの2日間、2020年度夏の研修交流会が行われました。今回は長崎で開催される予定でしたが、新型コロナウイルスの影響があったため、Zoomを通して初オンラインでの夏の研修交流会となりました。

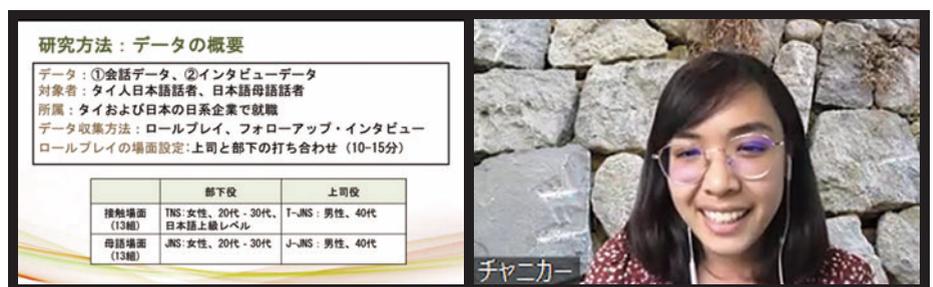
今年の夏の研修交流会では、大学院奨学生による研究発表と、OBによるミニ講義が行われました。研究発表では、経済学、社会福祉学、法学、日本語・日本文学など、様々な分野についての発表がありました。発表者の皆が丁寧に説明してくれて、他分野の発表でも大変わかりやすかったと感じました。お互いにそれぞれの研究について共有し、意見交換することができて、非常に有意義な機会でした。研究発表のあとに、2名のOBによるミニ講義があって、先輩の面白いエピソードを聞かせていただきました。留学時代から現在に至るまでの話を聞いて、いろいろ勉強になりました。ミニ講義を聞いているうちに、つい皆の修了後の姿を勝手に想像してみました。それぞれ研究の道を歩んで、これからは様々なところで活躍していくと思います。今年も夏の研修交流会とい

う場でかめのりファミリーの絆を深めていくことができ、大切な思い出になりました。

今回は長崎へ行けなくて、非常に残念でした。オンライン開催で日本国内のみならず、海外にいるOB及び奨学生まで参加ができ、様々な場所にいるかめのりファミリーのメンバーが集まって、とても温かい雰囲気でした。新しい生活様式に沿った新たな開催形式でも非常に充実な夏の研修交流会になったと思います。

そして、9月12日に授与式に参加しました。3月から延期されましたが、夏の研修交流会の時期と合わせて開催されました。新型コロナウイ

ルスの流行が収まらない状況の中でも今年の修了生・現役奨学生の皆さんと一緒に集まることができ、オンラインでの参加の方にもお会いできて、非常に嬉しく思いました。特に修了生の白さん、楊さん、趙さん、チャウさんと、昨年函館での研修交流会でとても楽しく過ごしたことを思い出しました。そして、新奨学生の宜さん、孫さん、苗さんとは、オンラインではなく初めて対面して、少し緊張しましたが、いろいろ話したい気持ちもいっぱいでした。これから新しく加わったかめのりファミリーの皆さまと仲良くしていきたいと思っています。



大学院留学アジア奨学生 証書授与式

延期となっていた2020年度採用の奨学生を迎える証書授与式を、
2020年9月12日(土)にアルカディア市ヶ谷にて行いました。

4月より延期となっていました、2020年度採用の大学院留学アジア奨学生を迎えての証書授与式を、アルカディア市ヶ谷にて執り行いました。

半年経ちようやく全員揃うことができた今年度の新奨学生3名は、商法、社会福祉、そして計量経済学を専門とする中国出身の留学生です。挨拶のスピーチからは、3名とも専門性が高く時代の要請にも見合った研究を意欲的に行っていることや、それぞれに強い芯のある人柄が伝わってきました。

証書授与式に続いて、2020年3月をもって修了した4名の奨学生へ、記念品が贈呈されました。4名は引き続き日本で博士論文を執筆中ですが、かめのり奨学生として過ごした間の経験や、研究生活の続く現在の思いについて、時に涙ながらに語ってくれました。

またこの日の特別ゲストとして、今後のキャリアのため日本を離れることになった2名のOG金 智恵と金 ポラが、社会人として日本で奮闘した体験を語ると共に、後輩の奨学生へ激励の言葉を贈りました。

なお、この日会場では、例年より広い部屋の使用や間隔を空けた座席の配置、マイクの消毒、アクリル板を用いた飛沫感染予防など、新型コロナウイルス感染症防止対策を重ねての実施となりました。また今回は会場への出席人数を最小限に抑えるため、奨学生選考委員や奨学生OBOGの多くはWeb会議システムを使ったオンラインでの参加となりました。会場出席者とオンライン出席者が共に参加する催しは、かめのり財団にとってこれが初めての試みでしたが、参加者全員の協力のおかげでトラブルもなく、無事に行うことができました。

同日午後の懇親会では、会場にいる奨学生たちが国内外からオンライン参加の選考委員やOBOGへ向けて、カメラ越しに挨拶の言葉を述べました。また続けて選考委員およびOBOGより、奨学生への励ましのメッセージを多数いただきました。自身の経験から語られた先輩たちの率直で力強い言葉の数々は、現役生や修了生たちが今後どのような道へ進もうと、常に寄り添い、支えとなってくれることでしょう。今、誰もが経験のないコロナ禍に巻き込まれている中で、この日は1日、参加者の間に深い心の相互交流が生まれていたように感じました。

撮影時は間隔を空け、直前までしていたマスクを外して撮影



マスクを外す場所には、アクリルパーティションを設置



Web会議システムを使って交流



かめのりカレッジ 2020 - エクストラ・エディション -

2020年7月25日(土)、9月19日(土)~21日(月)、10月31日(土)の5日間に渡り、グローバルでの活躍を目指す日本人大学生を対象に、オンラインプログラム「Kamenori College 2020 -Extra Edition-」を実施しました。



参加者全員でオンライン記念撮影

ディスカッションボードや発表のスライド



オンラインで証書授与

2019年より実施しているこのプログラムは、今年も2月に茨城県にて実施する予定でしたが、中止となりました。他の青少年交流事業も軒並み中止・延期となる中、コロナ禍においても開催可能な方法を模索し、当財団で初となる全日程オンラインのプログラムを企画・実施することになりました。

集合研修形式で行う本来のかめのりカレッジは、グローバルな環境における実践を通じて、より活力のあるコミュニケーション力やマインドセットを養成することに主眼をおいています。一方で今回のオンライン開催では、多彩な講師が提供する様々な視点や論点を通じて、参加者の視野を拡げグローバルな感覚を醸成することを狙いとしました。また、英語力の向上を図るため英語でのディスカッションや発表を用意。これに向け、参加者には3カ月間のオンライン英会話の機会を提供しました。

今回のテーマは『Expand Your Horizons』。北は青森から南は高知まで12名の日本人大学生がこのテーマのもとに集いました。

メインセッション

7月に1度オンラインでオリエンテーションを行ったため、9月のメインセッションはスムーズにスタートしました。しかし、学生が一人ずつ英語での自己紹介を始めると、「英語があまりできないので…」という枕言葉が続出。十分な英語

力があるにもかかわらず、自信のなさからへりくだる表現が出てしまいます。本プログラムのディレクターでもある山本智巳講師からは、「このプログラムではどんどん失敗していいんだ」とのアドバイスがありました。学生にとってこの気持ちの切り替えは、後のセッションへの参加意識にも大きく影響したようです。

講師陣には大学教員の他、ビジネスの第一線で活躍する方、政府機関で働く方など、普段の大学生活では会う機会のない国内外の方々が多く含まれます。オンラインでは一方通行の講義となりがちですが、講師の方々には、学生との双方向のコミュニケーションが可能な場となるよう、グループディスカッションやチャット機能を使ったQ&Aなどを取り入れていただきました。

その中でも『New Normalの時代を楽しんで進む』という講義の中で、「パンデミックを楽しむ」という講師からの言葉がありました。この言葉は、この半年間で一変した大学生活を悲観的にとらえていた学生たちの心に特に強く響いたようでした。

9月21日の最後に行った振り返りの時間では、このプログラムを経験したことで「他の学生から良い刺激をもらった」、「自分を変えていきたい」という気持ちを語る学生が多くいました。

フォローアップセッション

9月のセッション終了時に学生たちは3チームに分かれ、10月31日のフォローアップセッ

ションで発表を行うチームプロジェクトが課せられました。このプロジェクトの目的には、チームビルディング、日本に関して学ぶこと、そして英語でのコミュニケーションの練習があり、約1カ月の準備期間に学生たちは何度もオンラインミーティングを重ね本番に臨みました。9月同様に各自自宅からの参加でしたが、どのチームも無事に発表を行うことができました。

発表の中では、クイズを使って他の参加者を引き込んだり、発表者が画面操作の学生にサインを送るなど様々な工夫が見られました。しかし、自分の力を十分に発揮できなかったり、満足のいく仕上がりまで準備しきれなかったと振り返る学生が多かったです。これは、英語で発表することの難しさもさることながら、オンライン上でしか会ったことのない者同士だと遠慮してしまい、活発に意見を交わすことができなかったというチーム内の関係構築の難しさもあるようでした。けれども、9月にも彼らに伝えたとように、かめのりカレッジは失敗をしていい場です。彼らがチャレンジし実感したことは、コロナ禍の社会で大人たちも難しいと感じている課題でもあるのです。

今回のプログラムで何かを完結するのではなく、ここでの出会いや学び全てが彼らのこれからにつながるものであることを願います。

特別インタビュー

コロナ禍からみた国際交流のこれまで、今、そしてこれから

独立行政法人 国際交流基金 (JF) 小島 寛之 氏

聞き手：公益財団法人 かめのり財団 理事・事務局長 西田 浩子

(公財)かめのり財団でも今年はコロナ禍による事業の中止が続き、国際交流事業のあり方を改めて見つめ直す機会ができました。今回、共同事業のパートナーである(独)国際交流基金(JF)で長年に亘って国際文化交流に携わってきた小島 寛之氏に、国際交流の過去・現在・未来についてお話をうかがいました。

国際交流基金の活動について

西田： はじめに、国際交流基金(JF)は、「文化芸術事業」、「日本語教育事業」、「日本研究・知的交流」と、3つの大きな柱の事業がありますが、どのような目的をもっているのでしょうか。

小島： JFの活動目的を一言で言えば、「日本と世界を文化でつなぐ」ということです。「文化」と言っても幅が広くて、「芸術」だけでなく「言葉」やさまざまな「知的活動」も含め、それらを通して日本と海外の人々が心と心を交わり、互いに理解し合う環境を作るのが我々の目的です。それが日本の外交にとっても、国際社会全体にとってもプラスになるという信念に基づいて活動しています。

西田： JFは海外24カ国に25拠点を展開している他に、国内に日米センター、日中交流センター、アジアセンターという3つのセンターがありますが、これらのセンターはどのような機能を持っていますか。

小島： 言うまでもなく、文化交流事業は息長く継続的に実施していくことが大事なのですが、同時に、JFとしては、その時々国際環境や政策課題などに対応した事業を臨機応変にやっていくことも必要です。3つのセンターでは、対象とする国・地域の特定の課題やテーマに応じた特別なプログラムを実施しています。

日米センターでは、日米関係のさらなる緊密化に向け、日米2カ国が手を取り合ってグローバル・イシューへの対応を強化していくための知的交流や市民交流事業を行っています。かめのり財団との共催事業のひとつ、日中交流センターで行なっている高校生の交流事業は、次代を担う日中の若者に交流の機会を設けるため、2006年度から始めた事業です。また、アジアセンターでは、2014年度から「日本語パートナーズ」派遣事業と芸術・文化の双方向交流を2本柱として事業を行っています。「日本語パートナーズ」は現地の中学、高校で日本語教育のサ

ポートや日本文化紹介を行うと同時に、相手国の言語や文化を学び、アジアの人々と心の絆を育むことを目的としています。

オンライン化が有効な国際交流事業

西田： 今年はコロナ禍によって国際交流が難しくなりました。今年度の事業はどうなっていますか。

小島： 今年の3月末ぐらいから、人が集まるイベントや国を超えての移動をともなう活動は基本的に中止・延期となりました。海外に派遣していた「日本語パートナーズ」などの事業関係者を、帰国を早めて日本へ戻すというオペレーションも実施しました。また、7月の日本語能力試験は全世界的に中止となりました。そのほかにも止むを得ず事業を縮小・中止したものもあります。

今できることをやっていくということでは、オンライン事業が筆頭に挙げられると思います。例えば、日本語教育事業でも、現地の日本語教師の研修などはオンライン化が相当進みました。オンラインなら地方の人でも参加できるし、優秀な日本人の専門家に各国の日本語教師会の研修講師として参加してもらうことも、日本に居ながらにできます。文化発信も同じで、例えばメキシコの拠点でスペイン語を使ってオンライン事業を行うと、他の中南米の国々の人も見ることが出来ます。オンラインはいとも簡単に国境を飛び越えてしまう。改めて、誰に向けて何を発信すべきか考え直す機会ともなりました。

西田： なるほど。しかし、オンラインのデメリットもあるのではないですか。

小島： もちろん、バーチャルで事業を実施することには一定の限界があります。例えば演劇などの実演芸術では、目の前で生身の肉体が演じるからこそ伝わるものがある。芸術だけでなく、例えば知的対話フォーラムなどでも、正式なセッションやディスカッションはオンラインで

可能でしょうか、休み時間や夕食時の人と人との交流をオンラインでできるかということ、生身の非言語コミュニケーションまで伝えるのは難しいと思います。

西田： かめのり財団も、人と人が直接触れ合う体験型の学びにこだわっていきたいのです。ただ、事前の研修や情報交換、事後のフォローアップやネットワークづくりは、オンラインでも十分意味がある。だから今後はリアルとオンラインのハイブリッドだろうと皆で話しています。

小島： それがまさにアフターコロナ時代の文化交流のあり方ですね。



かめのり財団 西田 浩子

国際交流基金とかめのり財団の日本語教育について

西田： 次に、JFにおける日本語教育の重要性について、お聞かせください。

小島： 日本語学習の目的は、国や地域、人によって様々で、多様化しつつあると実感しています。日本が経済発展していくに従って、海外の方々が日本企業や日本で働く機会が増えましたし、今や東南アジアの若い人たちは、キャリア形成のひとつとして、英語はもちろん他の外国語を学ぶことでステップアップしようという意欲が強いです。

2019年4月には日本政府が、新しい在留資格「特定技能」を設け、外国人材の受け入れを拡大する方針を打ち出しました。JFとしても、この動きに対応し、生活や就労の場面でのコミュ



独立行政法人 国際交流基金
企画部部长
小島 寛之氏

1992年より国際交流基金に勤務。マニラ・北京・ソウルの日本文化センター、日本研究・知的交流部、日本語試験センター等において、主にアジア地域の文化交流事業や日本語教育事業に携わる

などを行ってきましたが、結果として本当によかったと思っています。大学で日本語を専攻したり、日本へ留学したり、日系企業へ就職したり、日本とのつながりを持つ人が1人でも増えることが成果だと思っています。

※ 2018年世界各国の日本語学習者数上位10カ国 ①中国 ②インドネシア ③韓国 ④オーストラリア ⑤タイ ⑥ベトナム ⑦台湾 ⑧米国 ⑨フィリピン ⑩マレーシア (2020年度版『海外の日本語教育の現状』国際交流基金)

小島： そうですね。東南アジアの日本語需要の拡大は、もちろん先方の国の事情もありますが、かめり財団と実施している「にほんご人フォーラム」やJFの「日本語パートナーズ」など様々な事業が相乗的に効果を生み出していると言っているのではないのでしょうか。「日本語パートナーズ」の受入校のアンケートでは、生徒たちから日本に行きたくなったという回答が出るなど、日本に関わる次のアクションにつながる可能性があることを、我々も実感しています。

相手を知ることからはじめる 国際交流のあり方

西田： ここ数年、世界の潮流として自国第一主義が拡大し、米中や日韓の間に緊張関係が続いています。その中でJFやかめり財団が行っている国際交流や人材育成の意義とはなんでしょうか。

小島： 私も、最近かなり国際関係の潮流が変わってきていると感じます。しかし、日本は、国際協調を進めることで、国を発展させるという路線を一貫して歩んできたわけですから、その基本として、国や文化を越えて人と人との関係を築き、それを良好なものにしていくという私たちの活動は、中長期的に見て日本と世界にとって必ず役に立つ成果を生むと信じています。今まさに、いろいろな国がさまざまな背景を持った人によって構成されるようになってきて

いますよね。日本でも長期的に働いたり、生活をしたりする外国人が増えているし、国際結婚も多くなりました。そうすると、日本国内の市民生活においても、異なる文化背景を持った人々が、互いに理解し合い共生することが求められるようになってきます。いろいろな文化に触れて、フレキシブルに付き合い理解できる人材というのは、国内でも国際的にもますます必要とされていくと思います。

西田： 差別や偏見はお互いを知らないことからスタートするケースが多いですね。かめり財団の青少年交流事業でも、まず日本の中高生たちに海外へ行きアジアを知ってもらおう。ということが、日本のためにもアジアの国々にとっても重要なのではないかと考えています。

小島： それは大切なことです。私も90年代からフィリピン、中国、韓国と現地まで働いてきてひとつ言えるのは、それらの国々について日本人はどこまで知っているのだろうかということ。この10~20年の間に、中国をはじめとするアジア各国は激変しています。メディアを通しての理解だけだと、実際の変化がなかなか日本には伝わらない。だから、日本のことを知ってもらおうと同時に、自分たちもこの大きく変わったアジアの国々を知るべきだろうと思います。80年代、90年代には日本とアジア諸国との経済力の差は大変大きなものでした。現在、周辺諸国は大きく経済発展を遂げ、さまざまな形でのパートナーシップの可能性が広がっています。これは国際文化交流活動にとっても、大きなプラス要素だと思います。

西田： 相手を理解するためには「対等な関係」というのはとても重要ですね。少なくとも、相手を知ろうと努力する、そして、どこで折り合いをつけるか、ということが異文化理解だと、私は思っています。

かめり財団ができることは決して多くはないですが、これからも「知日」そして「知アジア・オセアニア」の人たちを地道に増やしていくことが重要なのだ、と改めて思いました。

ニケーションに必要な日本語能力を図ることを目的とした国際交流基金日本語基礎テスト(JFT-Basic)を2019年度に新たに開始しました。一方、アニメーションをはじめとした日本のポップカルチャーへの関心も根強く、日本文化に対する興味から日本語を勉強するという若者も相当数いますし、最近では日本へ観光に来る前に少し日本語を勉強したいという人も増えてきました。

近年、ベトナムやミャンマーなどの東南アジア諸国の学習者の増加が著しく、さらにそれがインドなど南アジアにも広がっています。その特徴として、必ずしも正規の教育機関ではなく、日本で働くことなどを目的に、民間の語学学校などで学ぶ人の割合が増えていることが挙げられます。

JFとしては、まずは現地の日本語教育のニーズに応えるということが第一ですが、海外において高い日本語力を身につけた人々が増えることが、日本社会にとってもプラスになるということが日本国内でも広くご理解いただけるようになり、日本語教育事業への期待が拡大してきたと言えますね。

西田： JFが2018年度に実施した「海外日本語教育機関調査」の報告書では、日本語学習者数トップ10※の中に東南アジアの国が5カ国入っていますね。かめり財団では、2012年から東南アジア5カ国の中等教育レベルの日本語教育支援をJFとの共催事業で行ってきました。中でもベトナムに対しては「中学生日本語キャンプ」の助成や「高校生にほんご人100人訪日事業」

国際交流事業助成 緊急支援助成決定

この度の新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 拡大という世界規模での非常事態への対応として、かめのり財団は7月に「緊急支援プロジェクト助成」および「留学生緊急支援金」の2つの緊急助成を実施いたしました。以下にそのねらいと経過について報告いたします。

緊急支援プロジェクト助成

その目的が緊急性の高い事業への助成であり、実施するタイミングが重要であること、ならびに助成総額の規模が限られていることから、対象を第11回～第13回のかめのり賞顕彰者(計9個人/団体)に限定して公募を行ったところ、7団体から総額728万円の申請をいただきました。当委員会による書面選考の結果、6団体に計580万円の助成が決定し、交付しました。

選考に際しては、各団体の従来の活動やその対象者におけるコロナ禍の影響を確認するとともに、申請された活動の目的や実施方法について、緊急性や期待される効果を確認し、評価のポイントとしました。採択された6団体は、日本国内およびアジアの国々で活動していますが、コロナ禍における海外渡航の制限によって、日本人の海外派遣や外国人の渡日などの人的移動に支障をきたすとともに、休校や外出自粛の要

請によって、各団体の既存事業の活動範囲に制限がかかり、支援対象者(受益者)の収入減少や失業などの大きな影響を受けていることがわかりました。こうした、COVID-19の拡大によって、従来の活動対象者に生じた新たな課題などに取組み、緊急性の高い活動を採択しました。

採択された活動(図表参照)には、休校により中止になった海外での給食支援活動が、学校閉鎖期間も子供の栄養補強を続けられるよう村々を巡回する活動へ形態を変えたものや、日本国内の在住外国人向けの介護研修を失業者などにも受講できるよう支援し、安定した就労を目指す活動などがあります。

各助成先団体では、採択されたこれらの活動をすでに開始されており、その取り組みの経過については、ご報告をいただき次第、ご紹介いたします。

留学生緊急支援金

アルバイトなどの収入の大幅な減少により、就学継続に困難を抱える留学生に対する経済的支援を目的とする留学生緊急支援金についても、プロジェクト助成と同様にタイミング重視であることから、当財団の大学院奨学金の指定大学で、複数のかめのり財団奨学金が採用された9大学で募集を行いました。

応募した学生たちの経済状況として、アルバイトの収入減の他、本国の家族の失業などにより仕送りが困難になったケースもありました。当委員会でも書面にて支給要件などの確認を行った結果、18名の学生に支援金総額180万円を交付しました。

支援対象となった留学生からは、「自分の住む県がまた非常事態宣言を出すかもしれないから心強い」、「大学の寮費に使いたい」といった声をいただいています。

一方、今後数か月間の見通しとして、事態収束が見込みにくく、課題や困難を抱えた人々の状況のさらなる悪化も想定せざるを得ないことから、緊急支援プロジェクト助成については、第2弾も準備を進めています。

報告：助成審査委員会委員長 川北 秀人

緊急支援プロジェクト助成 採用団体一覧

団体名	事業名()内は活動地域	かめのり賞 受賞回
 特定非営利活動法人 日本・バングラデシュ文化交流会	大豆入り加工食品の巡回販売と、小学校児童及び支援者家族に大豆粉の配布(バングラデシュ)	第13回
 特定非営利活動法人 シェア=国際保健協力市民の会	住民参加によるプライマリヘルスケア強化事業(東ティモール)	第13回
 特定非営利活動法人 ISAPH(アイサップ)	子どもを守る、母と家族の母子保健サービス 利用促進事業(ラオス)	第12回
 学校法人アジア学院	アジア・アフリカ農村指導者育成事業 (日本/栃木県那須塩原市)	第12回
 一般社団法人 グローバル人財サポート浜松	在住外国人のための介護職員初任者研修 (日本/静岡県浜松市)	第11回
 特定非営利活動法人 SALASUSU	新型コロナ禍での自分らしい生活を築くケアと トレーニングを通じたカンボジア最貧困層女性の キャリア形成プロジェクト(カンボジア)	※

※第11回かめのり賞受賞の認定特定非営利活動法人かめのはしプロジェクトより独立

2020年度 青少年交流事業 中止のお知らせ

今般の新型コロナウイルス感染症の流行が収束しない状況を鑑み、今年度の青少年交流事業の実施を中止いたします。詳細は弊財団HPをご覧ください。

<https://www.kamenori.jp>

かめのり財団 で 検索

発行人 / 西田 浩子
編集 / 谷本 知子
編集協力/悠プランニング 山本 加津子
デザイン/イワブチサトシ (BUTI design)
印刷 / 佐伯印刷株式会社



日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援します！

公益財団法人 **かめのり財団** The Kamenori Foundation

〒102-0083 東京都千代田区麹町5-5 ベルビュー麹町1階

TEL : 03-3234-1694 FAX : 03-3234-1603

E-mail : info@kamenori.jp URL : <https://www.kamenori.jp/>